

ワークショップ形式の人権学習会の効果 ～「人権」に対するイメージおよび意見の変容

堀田美保・塩崎麻里子・小川喜弘

Effectiveness of workshops on human rights

Miho HOTTA, Mariko SHIOZAKI, Yoshihiro OGAWA

This paper examined the effectiveness of workshops on attitudes toward human rights. Students who participated in the workshops were surveyed to measure the changes in their views and images of human rights before and after their participation. The results confirmed the effectiveness of the workshops: The workshop participants developed more positive images of human rights, and they felt more involved in human rights. Based on the findings, suggestions were made for further effective human rights education.

キーワード：人権学習、効果研究、大学生、態度変容

1. はじめに ～ 4 年間の人権学習会

総合社会学部は、2014年3月第1期卒業生を送り出すに至った。創設から4年の間、本学部人権・ハラスメント委員会では、人権感覚の育成を目指したさまざまな取り組みを継続的に行ってきた（表1参照）。

さらに、実施した学習会やミニ講義の成果を確認・検討することも重要な作業と位置づけてきた。たとえば、ネット上の情報倫理に関するミニ講義後には、参加者にe-learningを課し、講義で伝えた知識が吸収されているかの確認を行ってきた。そして、その結果を踏まえ、さらに意識すべき点について参加者自身や学部教職員に対してフィードバックを行ってきた。

また、2年生対象の学習会（表2参照）については、その効果の検討を重ねてきた。参加前・参加後にアンケートを行い、人権に対するイメージや態度の変容の有無を、さまざまな形式・テーマで行った学習会間で比較検討し、その結果に関して報告を行ってきた（堀田・佐

藤・西村・加治・ハタノ、2012；堀田・塩崎・鈴木・加治、2013）。これまでの効果研究から、示唆されたのは以下の点である。

- ①ワークショップ形式での学習会が効果的である。具体的には、学習会参加後に、人権がより身近なものであり、自分にも直接関わっている問題だという意識がより高まる。
- ②ワークショップの「今、ここ（now and here）」の原理（堀・加藤、2008）が実効性を持つには、疑似体験が必須である。
- ③扱われるテーマは、参加者にとって身近な問題であるだけでなく、「現在進行形」であることがより高い効果に繋がる。
- ④扱われる具体的な問題は、参加者自身の問題であると意識されるだけでなく、普遍的な人権の問題であるという意識への発展が必要である。
- ⑤扱われるテーマは参加者の専門性と繋がりがあることが好ましいが、その専門的知識は学習会で新たに学ぶのではなく、すでに学んだ

表1 本学部において実施してきた人権教育

対象	位置づけ	提供内容
新入生	人権に関する基本情報の理解	<ul style="list-style-type: none"> ●ハラスメント、特にアカデミック・ハラスメントに関するガイダンス ●学部における相談体制の紹介 ●ネット上の情報倫理に関するミニ講義および e-learning
2年生	人権への自己関与意識の高揚	<ul style="list-style-type: none"> ●人権に関わる基礎を学ぶ学習会
3、4年生	社会人としての人権への意識活性	<ul style="list-style-type: none"> ●就労環境における人権問題についての学習会 ●就活における SNS 利用における留意点に関する情報提供

表2 4年間に実施した2年生対象の人権学習会のテーマと形式

年度	専攻	形式	人数/クラス	時間	テーマ
2011	社会・マスメディア系	講演会	—	90分	国際人権法
2011	心理系	ワークショップ	60人/クラス	120分	自己の準拠集団
2011	環境系	ワークショップ	40人/クラス	90分	「違い」、平等とは
2012	社会・マスメディア系	ワークショップ	30人/クラス	90分	ジェンダー、言葉の暴力
2012	心理系	講演会	—	90分	マインド・コントロール
2013	心理系	ワークショップ	30人/クラス	120分	社会的立場
2013	環境系	講演	—	90分	健康権・受動喫煙

ことを学習会において人権という角度から見直すという作業になることが必要である。

以上のような点に配慮して、2013年度には、特に効果の高かった過去のワークショップ(2011年度開催)を再び実施し、その効果を確認するとともに、より一層効果を高めるための要件を探ることとした¹。すでに、堀田他(2012)において、2011年度および2012年度に実施した学習会については比較検討を行ったので、本論では、同じ担当者による2つのワークショップ、心理系専攻向けに実施した2011年度と2013年度の学習会の比較を行うこととする(表2における網掛部分)。これら2つの学習会の概要は以下のとおりである。

1 学習会の開催に際して、総合社会学部事務部、高橋陽子氏、大野朋美氏に多大なご協力をいただいた。また、大野朋美氏には、調査の準備および集計作業にご尽力いただいた。ここに心からの感謝の意を表します。

2011年度実施分

日時：2011年12月22日(木)、10:30~12:30、13:30~15:30の2クラス、

会場：本学EキャンパスA館101教室

題目：わたしの一歩が社会をつくる —自分をふりかえることから見えてくるもの

講師：栗本敦子氏 (Facilitator's LABO (えふらぼ))

概要：主要なものとして3つのワークから組み立てられていた。いずれも、小グループ活動と全体での振り返りによって進められた。

- ①自己紹介を振り返ることで、自己定義に「カテゴリー」が使用されていることを意識化する。
- ②自己の人間関係を振り返ることで、自分の周囲には類似した他者(同年齢、

同文化、同学歴など)が多く、自分の価値観が実は偏ったもの、限定された範囲でのものである可能性について考える。

- ③ゲームの中で多数派あるいは少数派として行動することで、自分の行動がいかに周囲からの影響を受けるか(同調や服従)、そしてそのような行動によって社会の少数派がどのような扱いを受けることになるのかについて考える。

2013年度実施分

日時：2013年12月19日(木)、13:00~15:00、
15:30~17:30、それぞれ2クラス、計4クラス

会場：本学EキャンパスG館303、304教室

題目：わたしと人権、近い？ 遠い？ —社会的立場をふりかえる

講師：栗本教子氏 (Facilitator's LABO (えふらば))、北野真由美氏 (特定非営利活動法人 えんばわめんと堺 代表理事)

概要：4つのワークから組み立てられていた。いずれも、疑似体験ワーク、小グループ活動と全体での振り返りによって進められた。

- ①じゃんけんゲームを通して、自分がいつの間にか「身につけていること」についての気づきを持つ。
- ②カードゲームを通して、上位・下位の立場に対して、無意識のうちにとっている姿勢や態度について、疑似体験とグループでの議論を通して改めて考える。
- ③さまざまな特性で描かれている人物を何名か例として挙げ、どの人物が「社会的に有利」であると思うか、小グループでの議論を通じて、私たちの社会における様々なカテゴリーを持つ「力」について考える。
- ④「近大生10の常識」づくりという作業を通して、「ふつう」であると思う

ことの危険性・差別性について改めて考えてみる。

以下、これらの学習会の効果について、参加した学生を対象に実施した調査に基づき分析を加える。

2. 調査報告

▼目的

学生が「人権」という言葉に対して抱くイメージや意見は人権学習会へ参加することで変容するのかについて検討することを目的とした。2つのワークショップ式学習会による効果を比較検討することで、今後の人権学習会開催の際に、留意すべきポイント、講師に依頼するポイントを明確にすることを試みる。

▼回答者および実施方法

ワークショップへの参加者を対象に、学習会への参加前と参加後の2回、調査を実施した(表3)。「参加前」データとしては、質問紙の配布・回収が行いやすい授業である「心理学実験B」にて、「参加後」データとしては学習会終了時に回答を求めた。表4に回答者数を示す。

表3 調査実施時期

年度	「参加前」	「参加後」
2011	2011年11月24日	2011年12月22日
2013	2013年10月17日	2013年12月19日

▼質問項目

以下の2群の設問から成る質問用紙とマークシート方式の回答用紙を作成し、配布した。

1. 「人権」という語に対するイメージ評定

形容語15対のそれぞれについて(表5参照)、「人権」という言葉を聞いて思い浮かべるイメージについて6段階で評定(両端の形容語について「とても」「少し」「どちらかという」と)を求めた。これらの形容語対は、関係における対等性という概念に関する調査(堀田、

表4 回答者数

年度	心理系専攻 在籍者数 ²	「参加前」回答者		「参加後」回答者	
		人数	対在籍者比	人数	対在籍者比
2011	124	118	95.2	110	88.7
2013	141	121	85.8	110	78.0

表5 イメージ評定に用いた形容語対

グループ名	形容語対	
柔らかさ・おおらかさ	柔らかい	硬い
	柔軟な	頑固な
	親しみやすい	近寄りがたい
	明るい	暗い
	面白い	つまらない
	自由な	不自由な
近さ・実現性	近い	遠い
	可能な	不可能な
	距離のない	距離のある
実質さ	ほんものの	みせかけの
	実質的な	表面的な
	現実的な	非現実的な
善さ	正しい	間違った
	プラスの	マイナスの
	カッコいい	カッコ悪い

表6 「人権」に関する意見項目

「人権」と自己との距離	①人権という問題は自分にとっても身近な問題だと思う 「人権の身近さ」
	②人権の問題に自分が直接関わることはあまりないと思う 「自己関与感のなさ」
「人権」主張の重要性	③自分の基本的人権を訴えることは大切なことだと思う 「基本的人権の大切さ」
	④最近権利ばかり主張する人が増えて困ったものだと思う 「権利主張への困惑」

2009) で用いられたものの中から、「人権」という言葉に対して評定可能と判断され選定されたものである。堀田他(2012)で分析した際に得られた因子構造に基づき、4つのグループに

分類されるものとして扱った。各対の形容語は評定軸の左右のどちらに置くかランダムに決定し、また、ランダム順で呈示した。

2. 「人権」に関する意見項目

教育機関や行政などが実施している人権に関

² 各年度4月1日現在

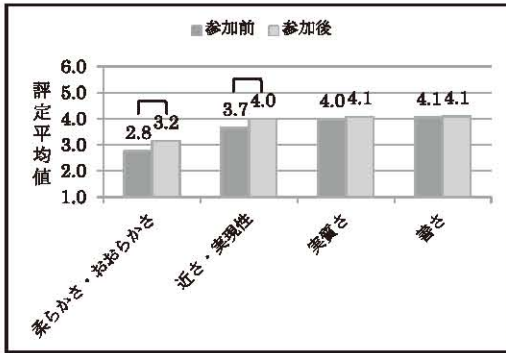


図 1a 2013 年度ワークショップ参加前後でのイメージ評定平均値
 註：図中「」印は、参加前後での平均差が有意

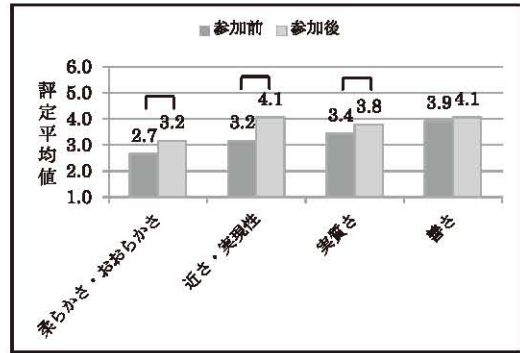


図 1b 2011 年度ワークショップ参加前後でのイメージ評定平均値
 註：図中「」印は、参加前後での平均差が有意

する意識調査において（たとえば、兵庫県、2009；近畿大学人権問題研究所、2010；内閣府、2012）よく用いられている質問項目を4つ選んだ（表6参照）。①②が「人権」と自分との距離にかかわる項目、③④が「人権」を主張する重要性に関する項目である。「まったくそう思わない」から「非常にそう思う」までの6段階から自分の意見にもっとも近いものを1つ選択するよう求めた。

▼調査結果

1. 「人権」という語に対するイメージにおける変化

形容語対に関する評定から、グループごとに平均値を算出した。2013年度の学習会では2名の講師が担当したので、まず、講師による差異の有無を検討するために、回答に対して講師(2)×参加前後(2)×グループ(4)の分散分析を行った³。その結果、講師に関わる効果で統計的に有意なものはないため（資料①【分散分析表】のAを含む効果）、両担当者によるクラスデータを一括して分析することとした。

2011年度および2013年度の回答に対して、

グループごとに算出した評定平均値を図1a、1bに示す。年度(2)×参加前後(2)×グループ(4)の分散分析を行った。分散分析結果は資料として掲載しておく。

3次の交互作用が統計的に有意であり（資料②【分散分析表】のABC）、ワークショップ参加前後で評定平均値の変化が見られる。両年度で非常に似た傾向を示しているが、ただし、2つのワークショップで若干異なる部分がある。2011年度では、「善さ」については変化はないが（資料【単純・単純主効果表】のB(a2c4)）、「柔らかさ・おおらかさ」「近さ・実現性」「実質さ」の3グループにおいて参加前後で平均値に有意な差異がみられる（B(a2c1)、B(a2c2)、B(a2c3)）。しかし、2013年度では有意な平均差がみられたのは「柔らかさ・おおらかさ」「近さ・実現性」の2グループのみであり（B(a1c1)とB(a1c2)）、「実質さ」「善さ」イメージの変化は見られなかった（B(a1c3)とB(a1c4)）。

つまり、両年度に共通した点として、ワークショップに参加することで、人権がより身近で、柔らかいイメージへと変化したことが分かる。しかし、「善さ」という点ではイメージ変化は見られない。2つの年度での相違としては、2011年度では、参加後に人権の「実質さ」イメージが高まったが、2013年度ではその変化

³ 学籍番号を用いて、参加前後で回答をマッチングさせた。したがって、参加前あるいは参加後のいずれかのデータがない場合は分析から除外した。その結果、2011年度については103名分、2013年度については102名分を分散分析に利用した。

が見られなかった。

ただし、両年度では、参加前のイメージの高さが異なり、2011年度よりも2013年度において「近さ・実現性」および「実質さ」の評定平均値がより高かった(A (b1c2) および A (b1c3))。さらに、参加後において、2013年度の方が「実質さ」の評定値はより高い(A (b2c3))。つまり、両年度の差異としては、2013年度には、2011年度に見られた「実質さ」の変化は見られなかったが、参加後ではむしろ2013年度の方が実質イメージはより強く、変化が見られなかったのは参加前から得点がより高かったためともいえる。

2. 「人権」に関する意見における変化

4つの設問それぞれについて、回答比率を参加前後で比較した。各項目を選択した回答者の比率を図2a、2b、2c、2dに示した。図中の左にあるカッコ内の数字は、「とてもそう思う」

「少しそう思う」「どちらかというと思う」の選択者比率を合計して、参加前後でのポイント差を示したものである。プラスは参加後に「そう思う」という比率が増えたことを意味する。

(1) 「人権」と自己との距離

図2aを見ると、両年度とも、参加後に「身近」だと感じる割合が増加しているが、2013年度は2011年度ほど増加分は多くはない。また、「自己関与感のなさ」についてみると(図2b)、やはり両年度とも割合は減少しているが、2011年度の学習会において減少幅はより大きい。

(2) 「人権」主張の重要性

「基本的人権の大切さ」については、いずれの年度・専攻においても、すでに学習会参加前から、8割前後の回答者が大切だと認識していた。そのためか、「思う」3項目の合計には参加の前後に変化がない。これは、上述の人権の

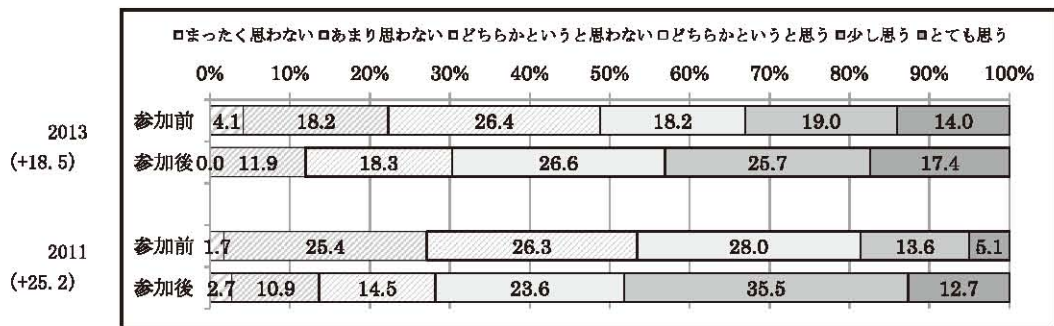


図2a 「人権という問題は自分にとっても身近な問題だと思う (「人権の身近さ」): 回答者比率

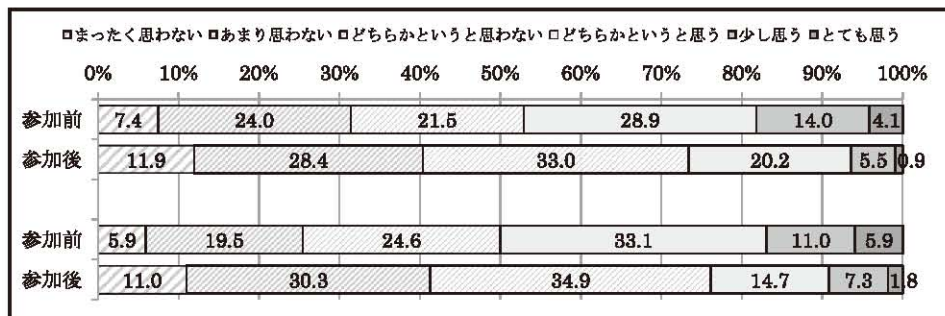


図2b 「人権の問題に自分が直接関わることはあまりないと思う (「自己関与感のなさ」): 回答者比率

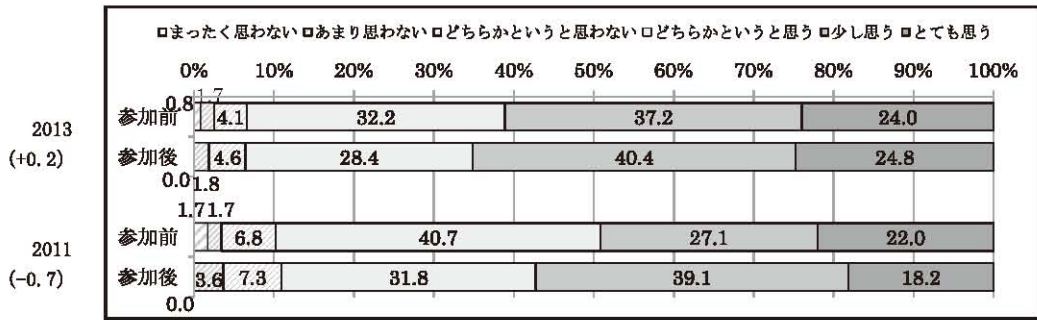


図 2c 「自分の基本的人権を訴えることは大切なことだと思う (『基本的人権の大切さ』): 回答者比率

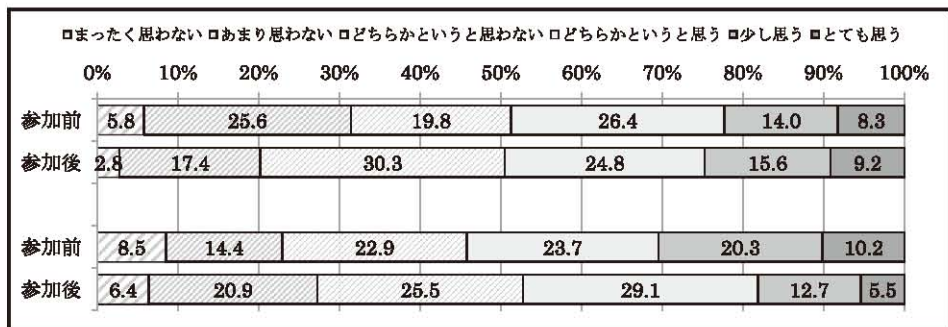


図 2d 「最近権利ばかり主張する人が増えて困ったものだと思う (『権利主張への困惑』): 回答者比率

「善さ」イメージと類似した結果と言える。ただし、2013 年度に比べて 2011 年度では、「どちらかというと思う」が減少し、「少し思う」が増加しており、大切さの程度が高まっている。最後に、「権利主張への困惑」については、2011 年度の学習会では、参加後、より「そう思わない」という方向への変化がみられるのに対して、2013 年度では学習会の前後で「あまり思わない」が減少し、「どちらかというと思わない」が増加してはいるものの、「思わない」の合計は 50% とほとんど数値はかわらない。

以上、「人権」の重要性については、参加前から認識されているためか、両年度とも、参加後の上昇幅は小さかった。人権を主張することへの困惑については、参加前に「思う」という意見は半数程度もあり、減少する余地はあったにもかかわらず、参加後の変化はあまり見られなかった。

3. 学習会参加後の感想

学習会終了時点で、学んだこと、さらに学びたいことについて感想を求めた。表 7 に主な感想を分類した。イメージや意見の変容に関する結果に見られたように、人権の身近さについて改めて認識したというコメントが一定数あった。また、ワークショップならではの、疑似体験や小グループでの議論を通じてその場での自らの考え方や振る舞いについて気づき、それを意識化することの重要性についての感想も多く見られた。さらに、そのことを踏まえて、日々の生活で自分がどうふるまえばいいのかに関してコメントした参加者もいる。が、その一方で、今回のワークショップを人権学習の導入として位置付け、その上で具体的にどうすればいいのかという次の段階について、もっと考える時間が欲しい、そこがわからないままであるという感想も多く見られた。

4. 考察および今後の課題

以上の結果から、2011年度と2013年度に行ったワークショップ形式の人権学習会は、同程度に効果的であり、その効果の中身について

も、「人権」は固くとつきにくいというイメージから、実際に身の周りで関わってくる、距離感の近いものというイメージへと変化が見られ、人権意識の啓発という目的にとつての、

表7 学習会参加後の主な感想

	分類	内容
学んだこと・考えたこと	身近さの認識	人権という問題が身近な問題である、という認識 (具体例)・人権問題は自分と関係ないように感じていたが、親しみのあるもの、身近なものに感じた ・〇〇問題と名前がつくものだけでなく、自分の身近に人権に関することがないか考えようと思った ・人権は思ったよりも単純で身近なところにあるので、もっと深く考えたい
	意識化に関する学び	改めて意識したという体験、日常で意識することが大事である、という学び (具体例)・わかっているようでわかっていなかったことに直面した感じ ・知らず知らずのうちに身に染みついていくことが多いことを知った ・人権とは頭で考えるものではなく、自分でしっかり意識するものなのだという事 ・頭で差別はいけないとわかっているが、実際はそれに左右されているかもしれないと思った ・常識とか空気で、知らない間に人を差別してしまっているかもしれないということ ・グループで話をしていても「この人普通ではないな」と感じている自分に気がついた ・他人事、傍観者ではなく、どう意識するかが重要だと感じた ・意見が異なっているけど、相手の感じていることに共感できること、尊重出来ることを知った
	テーマに関する学び	「力」に対する向き合い方、「ふつう」の差別性など、テーマに関する学び (具体例)・社会的「力」そのものが問題なのではなく、それに対する人々の接し方や使い方が重要 ・「普通」という考えが、差別につながるということ ・何に「力」があるのかを決めるのは自分であるということ
さらに学びたいこと	今後の行動の認識	どうすべきか、という今後の行動についての認識 (具体例)・自分はなにかしらの差別を行ってしまうことを前提に行動すれば、バランスがとりやすいと感じた ・ゲームで「力」をもった時に感じた優越感はずいぶん普段の自分ともリンクするところがあり、その時感じた気持ちを素直に見つめなおし、深く考えたいという気持ちにさせられた ・差別のない社会にするには、全員が他人に何か求めるのではなく、自分が努力すべきだと思った
	今後の行動の仕方	具体的にどう行動すべきか、に関する疑問 (具体例)・立場や力をどう考え、どう自分自身の行動にうつすか ・自分が「力」を持ったとき、自分のふるまいをどのようにすれば良いのか、逆にわからなくなった ・差別をしてしまう自分に気がついた上で、どう行動していったら良いのか ・差別をなくすためには、どのように行動すればよいか ・自分の身につけたいもの、捨て去りたいものについて、もっと知りたかった
	人権という概念	人権尊重とはどういうものなのか、に関する疑問 (具体例)・人権の目指す世界のありかたはどのようなものか？最終的な目標は？ ・結局人権とはなんなのか、差別とか地位とかもっと考えたい ・本当に「平等」が絶対なのか疑問を感じた
	「力」「ふつう」という概念	社会における「力」とは、「ふつう」とは、などテーマに関するさらなる疑問 (具体例)・本当の「力」とは何か ・結局、「社会的に有利」とはどういうことなのか ・「空気」や「なりゆき」と感じるのはなぜか、もっと考え、共有したかった ・何が社会に影響を与えるのか ・どうして自分の力より強い人に反抗する人は少ないのか ・もっと根深いところまで聞きたかった ・常識の出処について

ワークショップの有用性が再確認されたと言える。森（2006）や柴原（2009）は、人権学習がまずは自己の関わりから出発することが必要であると主張している。そして、その次に、自己から出発した意識を、二者関係における相手、集団や組織における他者、そして社会における様々な成員へと広げる流れで人権学習を進めていくことで、実際に自分の身の回りから行動を起こす、主体的に動ける力の育成につながるとしている。これらの考え方にに基づき、2年生対

象の人権学習会については、人権の「日常性」や「自己関与」を感じられることを狙いと定めて実施してきたわけであり、その意味ではこれらのワークショップは成功であると言える。両年度の傾向は類似性が高く、安定した結果と言える（表8参照）。

ただ、効果が十分というわけではない。今後の課題として2点指摘して本報告を終えたい。第1に、「柔らかさ・おおらかさ」イメージは、参加後に上昇してはいるが、平均値は評定中央

表8 2つの学習会の特徴と参加後の変化概略

	項目	2013年度	2011年度
学習会の特徴	形式	ワークショップ	ワークショップ
	クラスあたり的人数	約30名	約60名
	時間	2時間	2時間
	その場での疑似体験	あり	あり
	参加者間の交流	あり	あり
	テーマ	自己と人権	自己と人権
	使われた具体例	社会的立場・力 普通であること	自己の準拠集団 多数派への同調
	具体例の現在進行性	高い	高い
	専門との繋がり	高い	高い
	参加前の知識	なし	あり
参加後の変化	「柔らかさ・おおらかさ」イメージ	↗	↗
	「近さ・現実性」イメージ	↗	< ↗
	「実質さ」イメージ	→	< ↗
	「人権の身近さ」	↗↗	< ↗↗↗
	「自己関与感のなさ」	↘↘↘	< ↘↘↘
	「善さ」イメージ	→	→
	「基本的人権の大切さ」	→高	→高
	「権利主張への困惑」	→	< ↘

註1：イメージ評定については、有意差のあったものを上向矢印（↗）で表示

註2：意見評定については、「とてもそう思う」「少しそう思う」「どちらかというと思う」の3項目の合計比率の参加前後の差異が5、10、20ポイント以上の場合、それぞれ上向・下向矢印（↗または↘）1つ、2つ、で表示

註3：差異のない場合は右矢印（→）で表示

註4：2つの年度で差異のある項目に網掛け表示

値の3.5を超えることはなく、やはり「硬い」「近寄りづらい」「暗い」「つまらない」というイメージは根強いと言える。第2に、「実質さ」「善さ」についても評定平均値はおおよそ4.0であり、「どちらかという」という程度に留まっている。特に、「実質さ」の上昇は重要であり、日常生活の中で個人が自己および他者の人権を守ることは、実現可能であり、人権尊重とは机上のスローガンではなく、日々の暮らしにつながっていることを実感することが次のステップであろう。こういったイメージがさらに上昇するためには、どのようなワークが必要なのか検討を要する。

また、「権利主張への困惑」という意見に対して、「そう思う」という比率も低くなく、「権利主張」のイメージがよくないことも問題であろう。1つには自分の権利のみを主張する、一方的で自己中心的なイメージがある可能性もある。自他ともに互いの権利を尊重する方法を知り、自己中心的・一方的な自己主張との違いを知ること重要な学びのポイントとなってくるだろう。

参加後の感想には、今回の学習会は「人権について導入」と位置づけている参加者もおり、ワークショップで得た体験や気づきを日々の生活でどう生かしていくか、具体的にどのような行動が可能か、どうすべきかという点について不明瞭なままである、というコメントが散見された。120分という限られた時間であり、また年1回の開催ということもあり、そこから学びを深めていける場、時間が必要と言えるだろう。学生にとっては人権学習以外にも講演会や就職関連のイベント等もあり、今以上のペースで授業外に人権学習会を開催することは難しい。共通教養科目である人権関連の授業や、その他の専門科目で人権に関わっている授業と連携をとることで、ワークショップでの学びが継続され、展開していく方策を検討することも、今後の課題と言える。

学習会が学生にとって人権という問題について親しみ、新たな気づきを得て、実践につながる学びの場として有意義な機会となるよう、引

き続きこのような学習効果の検討と、効果的な学習プログラムについての情報収集に努めることで、より一層の改善を行っていきたい。

参考文献

- 堀公俊・加藤彰 (2008). ワークショップデザイン：知をつむぐ対話の場づくり 日本経済新聞出版社.
- 堀田美保 (2009). 「対等」という語に対する一般的イメージについての一考察 近畿大学文学部論集 文学・芸術・文化, 21(1), 15-39.
- 堀田美保・佐藤望・西村香奈絵・加治増夫・ハタノ, リリアン テルミ (2012). 「人権」に対する態度およびイメージ変容に関する調査—ワークショップへの参加がもたらす効果 近畿大学総合社会学部紀要, 2(1), 1-11.
- 堀田美保・塩崎麻里子・鈴木光祐・加治増夫 (2013). 人権学習会参加は「人権」に対するイメージおよび意見の変容をもたらすか 近畿大学総合社会学部紀要, 3(1), 1-12.
- 兵庫県 (2009). 「人権に関する県民意識調査」調査結果 (平成20年度) 2009年6月24日, http://web.pref.hyogo.jp/hw05/hw05_000000013.html (2013年3月5日現在).
- 近畿大学人権問題研究所 (2010). 2009年度近畿大学学生の人権意識調査報告書 (集計編).
- 森 実 (2006). 人権学習の領域と内容から学習を構想する 人権学習カリキュラム検討委員会 (編) 人権学習プログラムづくりの原理 (財)大阪府人権協会 pp.9-23.
- 内閣府 (2012). 人権擁護に関する世論調査 (平成24年8月調査) 2012年10月22日 <http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-jinken/index.html> (2013年3月5日現在)
- 柴原浩嗣 (2009). 人権学習のプログラムと教材づくり—教材「人権学習シリーズ」の試み 部落解放研究, 184, 32-48.

資料① 2013 年度学習会における担当者による差異の確認

【分散分析表】

source	SS	df	MS	F	p	
A : 担当者	1.4410704	1	1.4410704	0.460	0.4991	
error [S(A)]	316.3358018	101	3.1320376			
B : 前後	9.6470713	1	9.6470713	13.746	0.0003	****
AB	1.7419261	1	1.7419261	2.482	0.1183	
error [BS(A)]	70.8835827	101	0.7018177			
C : 因子	165.4013315	3	55.1337772	95.029	0.0000	****
AC	2.2840444	3	0.7613481	1.312	0.2705	
error [CS(A)]	175.7934551	303	0.5801764			
BC	5.1664961	3	1.7221654	6.271	0.0004	****
ABC	0.5040690	3	0.1680230	0.612	0.6078	
error [BCS(A)]	83.2049803	303	0.2746039			

*p < .05、**p < .01、***p < .005、****p < .001

資料② 2011 年度および 2013 年度学習会における効果の検討

【分散分析表】

source	SS	df	MS	F	p	
A : 年度	14.2781253	1	14.2781253	5.165	0.0241	*
error [S(A)]	561.1575790	203	2.7643230			
B : 前後	48.6596404	1	48.6596404	60.452	0.0000	****
AB	6.5218604	1	6.5218604	8.102	0.0049	***
error [BS(A)]	163.4008883	203	0.8049305			
C : 因子	285.7277252	3	95.2425751	150.991	0.0000	****
AC	7.6813018	3	2.5604339	4.059	0.0072	**
error [CS(A)]	384.1481791	609	0.6307852			
BC	17.1607683	3	5.7202561	19.210	0.0000	****
ABC	3.0002072	3	1.0000691	3.359	0.0186	*
error [BCS(A)]	181.3418255	609	0.2977698			

*p < .05、**p < .01、***p < .005、****p < .001

【単純・単純主効果表】

effect	SS	df	MS	F	p	
A (b1 c1)	0.6236998	1	0.6236998	0.785	0.3757	
A (b1 c2)	12.1013628	1	12.1013628	15.234	0.0001	****
A (b1 c3)	13.4541885	1	13.4541885	16.937	0.0000	****
A (b1 c4)	1.0383017	1	1.0383017	1.307	0.2531	
A (b2 c1)	0.0002879	1	0.0002879	0.000	0.9848	
A (b2 c2)	0.1408117	1	0.1408117	0.177	0.6738	
A (b2 c3)	4.1135851	1	4.1135851	5.178	0.0230	*
A (b2 c4)	0.0092572	1	0.0092572	0.012	0.9140	
error		1624	0.7943648			
B (a1 c1)	7.9208520	1	7.9208520	18.657	0.0000	****
B (a1 c2)	6.2779757	1	6.2779757	14.787	0.0001	****
B (a1 c3)	0.5852429	1	0.5852429	1.378	0.2407	
B (a1 c4)	0.0283730	1	0.0283730	0.067	0.7961	
B (a2 c1)	13.1124710	1	13.1124710	30.885	0.0000	****
B (a2 c2)	40.4437367	1	40.4437367	95.260	0.0000	****
B (a2 c3)	5.7831082	1	5.7831082	13.621	0.0002	****
B (a2 c4)	1.1907167	1	1.1907167	2.805	0.0944	
error		812	0.4245600			
C (a1 b1)	108.1937441	3	36.0645814	77.679	0.0000	****
C (a1 b2)	62.6804294	3	20.8934765	45.002	0.0000	****
C (a2 b1)	86.7463282	3	28.9154427	62.281	0.0000	****
C (a2 b2)	55.9495007	3	18.6498336	40.170	0.0000	****
error		1218	0.4642775			

*p < .05、**p < .01、***p < .005、****p < .001